

# UMAP を通じた新潟大学の交流事例

新潟大学(国際センター)教授 宮田 春夫

MIYATA Haruo

キーワード： UMAP、大学間交流、学生交換

## はじめに

新潟大学では、2010年度からアジア太平洋大学交流機構(University Mobility in Asia and the Pacific: UMAP)によるオンライン学生交換に参加している。二大学間協定の無い大学から学生が来るなど、長所がある一方、うまく対処して行かなければならない課題も多い。その現状を以下に御紹介し、御参考に供したい。

## 現行の UMAP 学生交換

2008年度からの試行期間を経て、2010年度から UMAP のオンライン学生交流システム(UMAP Student Connection Online: USCO)が正式に動き始めた。英語での開講、単位互換を前提にし、かつ、募集情報提供及び当初の応募は USCO ウェブサイトから行うこと、受入大学の選定は、学生の希望大学の記載の範囲内で UMAP 事務局が機械的に行うこと、学生の配分を受けた大学は、自らの規定に基づき学生受け入れ手続きを行うこと、受入大学は授業料不徴収とすること、宿舍を無償提供または確保を支援することがその基本である。交換期間は1学期間または1年間(2学期間)である。

学生の募集は年2回行い、秋入学と翌年春の入学で1募集年度を構成する。秋入学生の募集は1月から2月前半、春入学生の募集は、前年の7月から8月前半に行われている。

各年度の1大学あたりの交換学生数は、当初、受け入れ、派遣それぞれ2名であったが、2012年度から、それぞれの大学の意思により5名とすることも可能となった。

年2回の募集のうち1回の募集にのみ参加する大学があること、また、新規参加がある一方でとりやめる大学があるため、参加大学数の判断が難しいが、2013年秋入学分の募集に関しては、ブルネイ1大学、日本3(広島、国際教養、新潟)、マレーシア1、メキシコ1、フィリピン7、台湾25、タイ23、ベトナム1の、計8か国・地域、67大学であった。2014年春入学参加大学は未確定であるが、数年間参加のなかった韓国の大学が再び参加している。日本からの参加は、これまで国公立大学ばかりであるが、他国では私立大学の参加も多い。それぞれの時点の参加大学は、次のページで確認できる。

<http://www.umap.org/usco/en/directory/UMAP-members.php>

2013年秋入学の状況は次表のように19名で、1年度に約40名と見込まれる。

学生	派遣大学	受け入れ大学
1	Autonomous University of Baja California (メキシコ)	国際教養大学(日本)

2	Autonomous University of State of Hidalgo (メキシコ)	China Medical University (台湾)
3	China Medical University (台湾)	広島大学(日本)
4	Fu Jen Catholic University (台湾)	広島大学(日本)
5	I-Shou University (台湾)	Eastern Asia University (タイ)
6	Mae Fah Luang University (タイ)	Overseas Chinese University (台湾)
7	Maharakham University (タイ)	National Taiwan Normal University (台湾)
8	Maharakham University (タイ)	Shih Chien University (台湾)
9	National Cheng Kung University (台湾)	King Mongkut's University Thonburi (タイ)
10	National Chung Hsing University (台湾)	Ateneo de Manila University (フィリピン)
11	National Kaohsiung First University of Science and Technology (台湾)	King Mongkut's University Thonburi (タイ)
12	National Yun Lin University of Science and Technology (台湾)	新潟大学(日本)
13	Southern Taiwan University of Science and Technology (台湾)	新潟大学(日本)
14	Tunghai University (台湾)	Assumption University (タイ)
15	Tunghai University (台湾)	Universiti Brunei Darussalam
16	Universidad Autonoma de Ciudad Jarez (メキシコ)	National Yun Lin University of Science and Technology (台湾)
17	Universidad de Guadalajara (メキシコ)	国際教養大学(日本)
18	University of Colima (メキシコ)	Bangkok University (タイ)
19	University of Colima (メキシコ)	Fu Jen Catholic University (台湾)

### 新潟大学の参加の経緯

2010年度受け入れ分(2010年度秋入学と2011年春入学)からのUSCOの本格実施の機会に、二大学間交流の無い大学からも学生を受け入れ、また派遣して、学生交流を多様化しようと、本学もUSCOに参加した。その際、受け入れに関しては、新たなプログラムを立ち上げるのではなく、二大学間協定による受け入れが前提の既存の短期留学プログラム科目のうち英語で開講しているものを履修してもらうこととした。交換期間は、学生の都合次第で、1学期間でも1年間でもよいこととした。

本学が参加手続きを行うと、韓国、メキシコ等の学生からの照会があり、そのうち韓国からの学生1名がUMAP事務局から本学に対して割り当てられた。これを受け、2010年秋にその学生を受け入れることになったが、個人的理由によるとしてその学生は辞退し、実現しなかった。本学から他大学に留学する学生は無かった。

しかし、2011年春入学分では、英語で授業を行っているタイのメ・ファー・ルアン大学の2名により初めてのUMAP留学生受け入れ(1学期間)が実現した。うち1名にはJASSOの留学生交流支援制度(短期受入れ)による奨学金を配分することができた。

2011年秋にはメキシコのグアダハラ大学の1名が1学期間滞在した。その学生は、メキシコ政府の奨学金を得ていた。同国の別の大学からも1名が予定していたが、1年延期しても留学に必要な資金を確保できず、結局断念した。2012年春入学分としてフィリピンの1名が配分されたが、先方大学の手違いで資格無し(来日にまでに卒業)と判明し、実現しなかった。

2012年度から、それぞれの大学の意思により年5名とすることも可能となった際、

本学は5名を選択し、以後、年2回の募集の合計で5名ずつ受け入れている。

UMAPでは、以上の基本プログラム(プログラムA若しくはUMAP Multilateral Exchange: UME)のほかに、二大学間の合意による交換(プログラムB、UMAP Bilateral Exchange: UBE)及び限られた特定のテーマの超短期のプログラム(プログラムC、UMAP Student Exchange on Special Courses: USC)も認めている。2010年にマレーシアの大学の担当者が本学との2大学間の合意による交換に強い関心を示し、本学として前向きに検討したが、先方大学の事情により実現していない。他方、2012年には、3年間の予定で、1週間以上1か月未満のプログラムCのためのUMAP奨学金(各年、1人につき800米ドルを1実施大学につき最大10人、全体で100人まで)が給付されることになった機会に、現代日本の経験を学んでもらおうと、「Summer Course at Niigata University: Lessons from Contemporary Japan」を開始した。

このプログラムは、8月後半の2週間に、それぞれ2単位の2つの集中講義を行うもので、前半が筆者による「Environmental Problems and Development of Policies in Japan」、後半は、災害、企業経営等に関し数名の教員がオムニバスで行う「Japanese Experiences from Various Perspectives」である。いずれも、より具体的に理解できるよう、講義に加え、県や企業の協力の下、前者では新潟水俣病の関係施設の訪問や「語り部」による講義、後者では中越地震関連の場所や施設、企業等の訪問を行っている。また、前者は、2013年度からは教養科目と位置づけ、本学正規生等の単位修得を可能にした。

なお、暫定的に筆者個人のウェブサイト中の次のアドレスにこのプログラムのウェブサイトを設定、情報を提供している。

[http://www.isc.niigata-u.ac.jp/~miyatah/home\\_page\\_usco-c/](http://www.isc.niigata-u.ac.jp/~miyatah/home_page_usco-c/)

他方、派遣に関しては、2012年度に2名がフィリピンの大学での英語研修プログラムに参加したが、2013年に派遣した学生はいない。2013年のプログラムは2014年春までのため、派遣無しが確定した訳ではないが、問い合わせも無いのが現状である。

### プログラムA実施の課題

多様な大学が多様な科目を提供し、また、生活費等が安く済む場所が多いので、UMAPによる派遣には二大学間交流では実現しにくい多様な学生交換の可能性がある。

しかし、受け入れに関し、二大学間交流の場合と同じく、本学の英語での開講科目が限られ、本学に来る学生が十分な数の単位を取得することが難しいことに大きな問題がある。交換留学という枠組みだけで十分に対処することは困難であり、教員や事務職員を含め、大学全体の研究と教育の国際化の進展の中で拡充される課題である。

他方で、本学からの派遣はいまだ実現せず、学生からの照会さえもごくわずかに留まっている。これには、学内でよく知られていないこと、UMAPウェブサイト情報を掲載できるようになってから募集の締切までに1か月程度しかないことなどが関わっていると考えられる。募集期間になって初めて学内に情報を出すのではなく、日頃からこのプログラムについての情報を提供して、各学部の学務係や教員にその存在を認識してもらい、その上で、募集期間になったら速やかに募集の具体的情報を流すこと等により改善していくことが考えられる。他方では、UMAP自体においても、募集情報

掲載から募集締切までの期間を長くする等の改善をしてもらう必要がある。

### プログラムC実施の課題

本学が、大学としての基本に立ち、大学にふさわしい専門性のある教育を行うことに加えて、日本に来ることで初めて学べる内容とすることを目指して行っていること自体は妥当なことと考えている。本学の2012年のプログラムはUMAP事務局や理事会に高く評価され、同年10月に行われた台湾の参加大学のセミナーに、唯一、本学と本学のプログラムに参加した学生たちが招かれ、報告をすることとなった。また、2013年度に上限の10名分の奨学金を供与されたのは本学のみであった。但し、これには、日本への留学の希望者が多い中、日本で参加しているのは本学のみであることも関わっている可能性もある。

しかしながら、2012年の参加者は11名、2013年の参加者は10名に留まっている。応募者の辞退等の理由からは、その大きな要因が800ドルのUMAP奨学金であることが明らかである。恒久的な奨学金を設けることでこの問題が解決するのか、それとも、奨学金が全く無くなれば、プログラムの質だけで学生を集めることができるのか、学生の動向等を見ながら探っていく必要がある。同時に、比較的質の高いホテルを朝食付き3,500円で確保しているものの、滞在期間が短いために格安な学生寮や国際交流会館を提供できずにいる本学は、学生の滞在費等をいかに下げるかも探っていく必要がある。

しかし、参加者数が10名に留まっていることは、奨学金以前に、「夏休み」が日本の大学のそれと一致する国・地域は台湾以外にほとんど無いという厳しい物理的制約によるところが大きいと思われる。実際、2012年に本学に来た学生のうち9名が台湾、1名がタイ、1名がメキシコの大学からであった。2013年は、9名が台湾、1名がタイである。2012年の台湾の学生のうち3名がインドネシア人、タイからの学生はミャンマー人であったので、学生の顔ぶれには一定の多様性があった。しかし、2013年は、大学の所在地出身の学生のみであり、学生の多様性が乏しい。二大学間協定の無い大学から学生を得られているという積極的な面はあるものの、通常の学期中にこの種のプログラムを実施することは極めて難しい中、いかにして学生の多様性を高めていくか、方法を探っていく必要がある。

この課題は派遣についても共通である。2012年に派遣が実現したのは、先方大学が随時受け付けかつ期間も自由な英語研修プログラムを持っているからであった。「夏休み」期間が重なる台湾の大学も、プログラムの多くが中国語研修であり、学生にとって選択肢が多い訳ではない。プログラムCは、限られた内容でよく、かつ、期間も短くてよいため、比較的実現しやすい。台湾以外の大学が、本学の学生が行きやすい時期のプログラムを展開することに期待しつつ、台湾を含め、各大学において、本学のプログラムも参考にして、語学以外のプログラムも展開することを期待したいところである。

### 各プログラム共通の課題

UMAPのプログラムが本学内でよく知られていないことは、派遣に関し大きな障害に

なっていると同時に、受け入れに積極的に取組む際に必要な英語開講科目の数という制約にも多少関わっている。

また、二大学間交流の場合に比べると、先方大学との間の交流が乏しく、そのために、先方大学についての情報が不足していることから、学生が事件や事故に巻き込まれた場合に両大学が連携して円滑に対処できるか等、担当事務職員が漠然とした不安を感じる傾向もある。適宜国際事務局を通じ、また、UMAPの各種会合への職員の参加を拡大することにより、UMAP参加大学の関係者との信頼感醸成に努力する必要がある。また、中長期的には、大学の国際化を進める中で、多国間交流や、UMAP参加国等、開発途上国での生活に経験のある職員の採用等も考えられる。

そのほか、UMAPの管理面からは、事務局が各国持ち回りであることにより事務局の体制が必ずしも堅固である訳ではないという課題にどう対処するかも考えていかなければならない。技術的課題ではあるが、UMAPウェブサイトは必ずしも円滑に機能しているように思われず、しかし、タイに事務局があった時に構築されたものであるために、新たな投資をして全面的に構築し直さないと対処が難しいように思われる課題もある。

#### 今後に向けて

学生交換は、需要に対して必ずしもぴったりの供給ができていないように思われる。学生たちは何を求めているのか、大学は何を提供できるのかも十分に明らかにならない中で、プログラムが実施されているようにも思われる。他方では、プロジェクト方式の奨学金若しくは助成のある期間のみ交換留学が行われる可能性があり、持続発展性に不安もある。或いは、内容は良くても、奨学金や助成が無いために、同じ時期に行われている必ずしも質が高くないプログラムに学生が取られているプログラムがある可能性もある。他方で、教員や事務職員の負担は小さくない。

しかしながら、社会全体がグローバル化の中にあることは厳然たる事実であり、その中に置かれている大学も、それに対応していかなければならない。グローバル化への対応という上位目標の中に個別の目標を設定し、その目標の達成の様々な手段を効果的に位置づけ、実施していく必要がある。そのような位置づけを的確に行い、必要なリソースを配分する中で、UMAPによる多大学間学生交換も役割を果たすであろう。